

マンションの屋上農園。左側には太陽熱温水器が並ぶ—東京都内で



同志集い「エコビレッジ」

「農的暮らし」満喫

琵琶湖東岸の滋賀県近江八幡市。のどかな水田地帯が広がる市の郊外に約十五軒の住宅団地「小舟木エコ村」が現れた。まばらに立つ住宅には、どれも庭に木が植わり、塀がなく開放的だ。県内の大学や企業の関係者などでつくるエコ村ネットワークが提唱し、事業会社「地球の

塀なし菜園あり

芽」が泉や市などと連携して進めているプロジェクト。目標は、人と自然が共存する持続可能な地域社会だ。

一戸建て住宅が三百七十二区画で、昨年七月に入居が始まり、現在八十五世帯が入居した。特徴は、全戸に三千平方メートル



菜園の手入れをする住民。コンポスト（手前右）で作った堆肥を使う—滋賀県近江八幡市の小舟木エコ村で

環境への負荷を減らす暮らし方を目指す人たちが集まって住む「エコビレッジ」への関心が高まっている。無農薬有機農法による家庭菜園を各家に設けたり、化学物質をほとんど使わない造りのマンションに住んだりとそのスタイルはさまざま。共通しているのは、住民間のつながりが強いことだ。
(重村敦)

環境への負荷を減らし、支え合うコミュニティをつくる暮らし方を求めるエコビレッジだ。有機農業や、太陽光、風力など自然エネルギーの利用、雨水・排水の利用、省エネ型の住宅などの取り組みが多い。

全国に100以上 支え合い、環境意識

に広がった。九五年にスコットランドで開かれた国際会議には四十カ国から四百人以上が集まった。現在は一万以上あるとされる。日本では、九四年に静岡県富士宮市で有機農業による自給自足の共同生活を始めた「木の花ファミリ」が先駆け。各地に百以上あるといわれ、京都府綾部市や長野県大町市などで新たな取り組みも出ている。

都市部共同住宅でも

上の家庭菜園があり、雨水タンク、生ごみを堆肥にするコンポストが設置されていること。基本は無農薬。団地の中央には、有機農業の講座も開かれる農産物販売所があり、「農のある生活」を支える。

二月に入居した川合恭子さん(左)は自宅で喫茶店を開いた。入居前からナスやジャガイモ、大根などを栽培。「最初は虫が出て、チャーキヤー言

ってましたが、今は家族の一員という感じ。できた野菜はどれもおいしかった」とニコリ。夫の紀之さん(左)も「人々との交流が楽しい。住み始めて環境への意識も高まりました」と話す。

今どきの入居者の半数が三十年代だが、定年後に移り住んだ年配者も。「地球の芽」の飯田航取締役は「皆さんが、自分たちのまちをつくっていく」と話す。

環境建築・エコビレッジデザインを専門とする日本大の糸長浩司教授は「環境を意識したライフスタイルの実現にはエコビレッジが適している。今後広がる」と見る。ただ、法制度の壁もある。生産緑地法では市街化区域の農地の保全が農業者の意志に任ざれており、市民が共同で菜園を隣接する緑あふれる環境に、外壁に杉の板材を住民が自分たちで張ったしやれた外観。二〇〇六年に入居が始まり、入居はきた。エコビレッジ特区を設ける手もある」と指摘する。

エコビレッジの国際的なネットワーク団体によると、一九六〇年代にスコットランドやインドなどで散発的に始まり、その後、世界